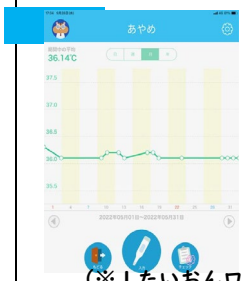
# 魔法のプロジェクト 活動報告書

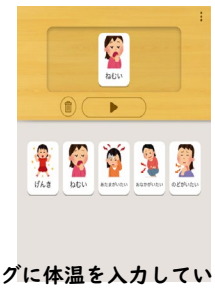
報告者氏名：鈴木　秀騎　　所属：福島県立いわき支援学校くぼた校　　記録日：2023 年　2 月 20 日
キーワード：体育、体調管理、健康、体力、コミュニケーション

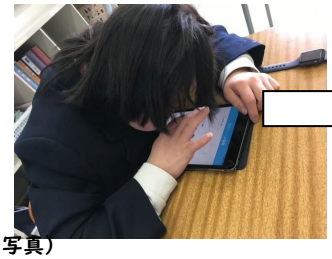
【対象児の情報】
・学年:高等部２年生　１６歳女児
・障害名:知的障がい
・障害と困難の内容:ダウン症、完全型心内膜症欠損症であり、運動制限等はないが、気持ちの切り替えや体力の調節が難しく、授業中座り込んでしまうことが多い。
３文字程度の言葉と身振りで伝えることができるが、発語が不明瞭で体調が悪い時にうまく伝えらずにいる。
体育の授業時間内では、活動時間が短く、他の生徒とのかかわる時間が短い。

【活動目的】
・当初のねらい
①iPad や Applewatch を活用することで体調を管理し、教員と話をしながら自分のペースで授業を実施することができる。それにより、休憩する回数が減るのではないかと考えた。また、保健体育の授業を通して、体温や手洗い、水分など健康に関することを、可視化することで、楽しく健康について考えることができると考えた。
②体調を確認する場面で、自分の気持ちが伝わらない時に、iPad を使用することで相手に気持ちを伝えることができると考えた。
・実　施　期　間：令和４年６月から令和５年１月
・実　　施　　者：鈴木　秀騎
・実施者と対象児の関係：体育の授業(週３回)を担当

【活動内容と対象児の変化】
・対象児の事前の状況
本校中学部より、昨年度入学した生徒であり、主に体調管理やコミュニケーションについて個別の支援を行っている。現在重複学級(１名)に所属しているが、体育の授業は、全校生徒(２８名)で授業を実施している。全体での休憩時間は設けているが、対象児の体力的な面や心理的な面から授業中座り込んだり、「やらない」と首を振ったりと休憩することがある。また、水分補給を促すが、時期によっては水分を摂らないことがある。
話しをすることが好きで、教師や生徒に積極的にかかわることができる。しかし、発語が不明瞭で、聞き取り取りにくいことがあり、体調確認ができないことがある。
・活動の具体的内容
対象児は、担任と一緒に体温と体調を iPad（※１たいおんログ、※２えこみゅ）に入力をする。併せて、Applewatch（※６周期タイマー）で担任がその日の授業時間を設定する。また、体育の授業開始時に自分の体調を記録したものを体育の教員に見せて伝える。







（※１たいおんログに体温を入力している写真）　　（体育教員に体調を入力した画面を見せる写真）

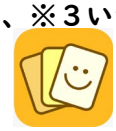
体調や体温、水分を摂っているか等を体育の教員と一緒に確認する。授業の休憩中や昼休みの際にも iPad を活用し、視覚的に理解しやすく、自分の体調を管理しながら考えることができる。

（水分補給※４waterllama に水分量を入力している写

（歯ブラシ※５はい菌カメラ写真）

授業中に心拍数を計測することで、心拍数が高い時に教員が様子を見て、声をかけることができ、自分のペースで進めることができる。

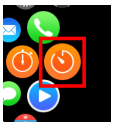
iPad 活用アプリ　（※１たいおんログ、※２えこみゅ、※３いつログ、※４waterllama

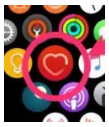


※５ばい菌カメラ、）

Applewatch 活用アプリ（※６周期タイマ

心拍数）





・対象児の事後の変化

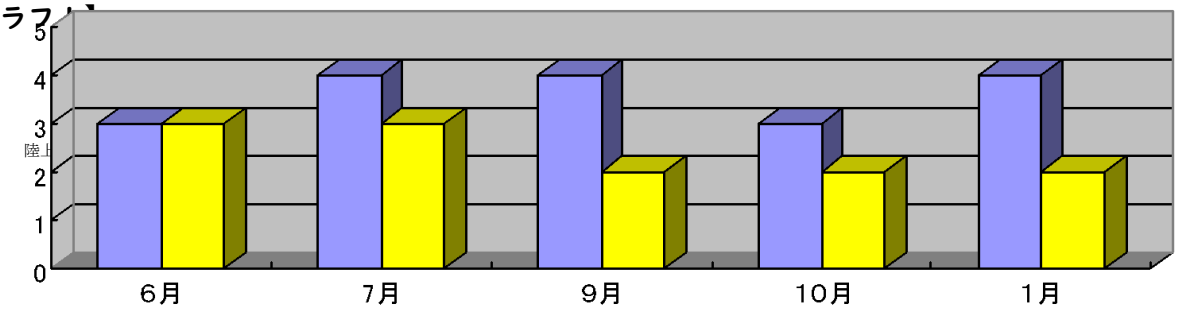
運動前と運動中の心拍数を計測し、教員と確認しながら授業を行う。心拍数が上がると Applewatch を指差し、教えてくれるようになり、無理なく授業を行うことができた。休憩する回数も大きく減少し、他の生徒と一緒に活動する時間が増えた。また、体調や体温を管理することで、授業の内容を生徒に合ったものを提示することができ、継続して授業に取り組むことができた。また、活動時間が増えたことで、生徒同士のかかわりも増えてきた。健康については、「みじゅ　いっぱ」など水をたくさん飲んだことを教えてくれるようになった。また、歯ブラシを落とした際に洗わないことを指摘すると「きたあい？　ばいきん」と確認するようになった。水分補給や手洗い、歯磨きなど可視化することで健康に関する意識が高まった。
他にも、対象児の iPad 活用方法が今まで YouTube のみであったが、様々なアプリを活用することで、iPad の使用する機会が増えた。
Applewatch で授業が終わり振動で知らせるようにしたが、普段つけない時計に違和感と興味があり、集中できなくなってしまうことから体育の授業のみ着用するようにした。しかし、着用している間は、定期排泄を促すことができ、短縮授業時にも通常授業時と変わらずトイレに行くことができた。

【報告者の気づきとエビデンス】
・主観的気づき
７月の授業を踏まえて、９月の授業では、個別にかかわる時間を多く設けることで継続して取り組めるようになるのではないかと考えた。

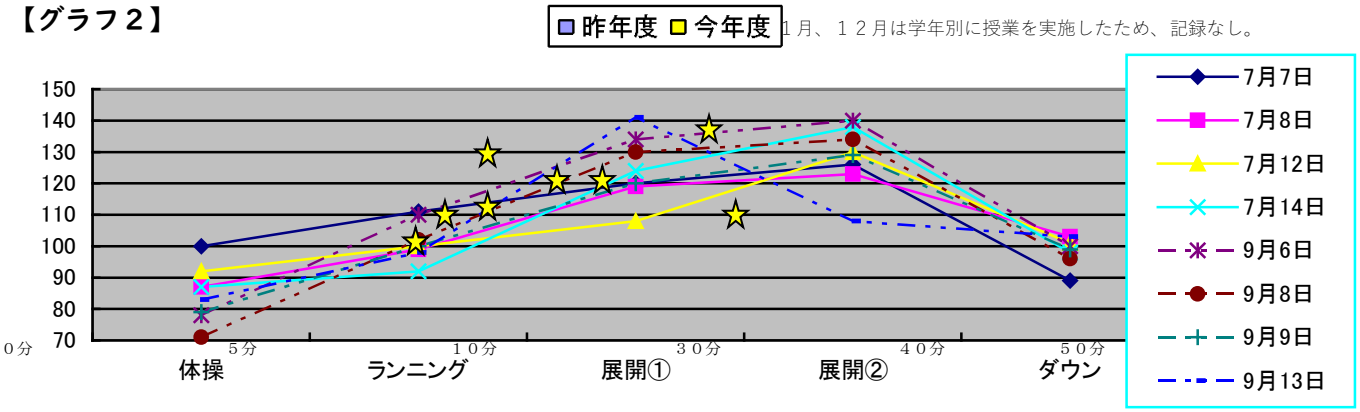
心理的問題では、本人の興味関心のある内容や言葉掛け等によって取り組みは変わるものの、記録としてデータを取ることが難しかったため、今後検討していきたい。
・エビデンス（具体的数値など）
【グラフ１】では、昨年度の休憩した回数を表している。題材や場所の環境によって異なるものの、全体的に休憩する回数が減ってきている。

【グラフ２】では、７月と９月に計４回ずつ心拍数を記録したものを表している。休憩したタイミングなどは、今回のデータでは、時間や運動強度は関係していないと考える。

【グラフ１】




【グラフ２】




・その他エピソード（画像などを含めて）

今回対象児との実践を通して、ＩＣＴ機器の活用の仕方について深く考える機会となった。障がいの特性や困難、目標を達成するための手段としてＩＣＴ機器を活用することで、できることやわかることが増え、学びにつながると考える。